

## 当社におけるオルタナティブデータの活用 ~データ戦略分散ファンド~

昨今注目されているオルタナティブ(非伝統的)データを使った運用に取り組んでいます。

**オルタナティブデータとは  
どのようなものでしょうか。**

オルタナティブデータとは、経済統計や財務情報など伝統的データ以外の多様なデータの総称で、ニュースやSNSなどのテキストデータ、衛星写真などの画像データ、要人の発言などの音声データをはじめ、POSデータ、クレジットカード情報、位置情報データなどが含まれます。誰でも容易に入手できる経済統計や財務情報等では情報の優位性で収益を得ることが難しくなったことから、オルタナティブデータへの注目が高まっています。

速報性のあるオルタナティブデータを活用し統計の公表前に経済動向を把握できれば、他の投資家に先行した投資判断が可能になります。また、他の投資家が使っていないオルタナティブデータを用いることは、独自性という観点からも有用と言えます。これらの利点により、リターン向上やリスク低減が期待される投資戦略を構築することができます。

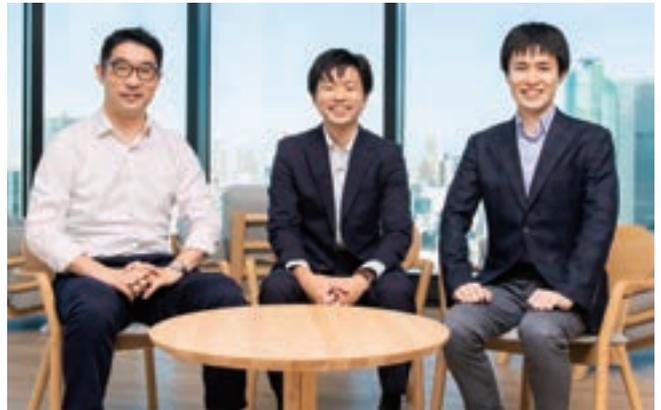
**オルタナティブデータを使用した当社の商品、  
データ戦略分散ファンド(愛称：dインパクト)  
についてご紹介ください。**

複数のオルタナティブデータから独自の景況感判断を行うことで超過収益の獲得を目標とするバランス型の公募投資信託で、2020年の12月に設定しました。NTTドコモとの業務提携により実現した投資信託であること、オルタナティブデータの活用により社会にインパクトを与えたいという願いから、dインパクトという愛称を付けました。

dインパクトは、ドコモ・インサイトマーケティングが提供する「モバイル空間統計<sup>®</sup>」(ドコモの携帯電話ネットワークの仕組みを使用して作成される人口の統計情報)を投資判断に活用しています。この他にも米連邦公開市場委員会(FOMC)声明文をテキスト情報として用いており、複数のオルタナティブデータを利用してアクティブな投資判断を行う投資信託は例がなく最先端の投資信託と自負しています。

**dインパクトが設定されるに至った背景を  
お聞かせください。**

当社では昨今の異業種の金融ビジネス参入の流れを受け、NTTドコモと既存の枠組みにとらわれないコラボレーションアイデアを模索していました。当社とNTTドコモの両社で議論を進める中で、NTTドコモには自社保有データの活用を促進したいというニーズがあったため、当社の運用開発グループからは



運用部 アクティブ・ソリューショングループ シニアマネージャー 保坂 玄太郎 (左)  
運用部 アクティブ・ソリューショングループ アシスタントマネージャー 逸見 龍太 (中)  
運用部 運用開発グループ アシスタントマネージャー 古庄 将也 (右)

当該データを超過収益の源泉とした運用モデル開発を提案し、まずはその有効性を検証することになりました。検証の結果、当該データを活用した運用モデルの有効性が確認できたため、当ファンドの開発・設定に至りました。

**dインパクトの運用モデルにおけるオルタナティブ  
データの活用方法についてお聞かせください。**

複数のオルタナティブデータから独自の景況感判断を行い、その結果に基づいて機動的な資産配分の変更を行います。「モバイル空間統計<sup>®</sup>」から、日本国内の工業地域や商業地域などの人の流れを見極め、景況感をいち早く判断します。またFOMC声明文のテキスト解析からは、米連邦準備制度理事会(FRB)の米国経済の捉え方をスコア化し、景況感を判断します。こうして得られた独自の景況感判断を基に、資産配分を機動的に変更することで超過収益の獲得を目指します。

**最後に、研究開発する上での醍醐味や  
苦労した点についてお聞かせください。**

位置情報を用いた投資戦略の開発、データベンダー以外の事業会社が保有するデータを利用した投資信託の設定は当社として初めての試みであり、好奇心を駆り立てられました。位置情報は非常に価値があり、さまざまな切り口での分析が可能であるため、分析の手段・方法について時間をかけて議論を行いました。適切なデータの扱い・分析方法に辿り着くまでに多くの苦労がありましたが、データから経済動向を捉えることができたときには、非常に大きな驚きと感動がありました。

## アナリスト情報共有体制の整備・高度化

運用高度化への取り組みの一環として、企業調査を担当するアナリストによるコメントをAIにより評価し、アナリストのノウハウを機械的に学習するシステムを開発しました。また、アナリストレポートに関する社内のシステムについて刷新を図り、アナリストがより企業調査に注力できる環境を整えました。

### ■ アナリスト文章の極性評価に対する共同研究

深層学習の目覚ましい成果を契機とする第三次AIブームもあり、資産運用業界においてもニュースなどの非伝統的データをAIの技術によりセンチメント評価するといった分析が活発となりました。当社でも蓄積されたアナリストレポートなどの文書データ資源を活用し、企業アナリストの評価コメントからそのセンチメントを自然言語処理で評価する取り組みを、神戸大学数理・データサイエンスセンターとの共同研究という形で2017年12月に開始しました。

共同研究の一環で、当社アナリストの往訪記録をもとにテキストデータから独自に訪問結果を評価するシステム開発に取り組みました。アナリスト往訪記録とは、決算説明会や取材に対するアナリストの見解などが端的に記載された情報です。担当業種や担当企業の決算短信について纏めたアナリストレポートは正確性が重視されているのに対し、このアナリスト往訪記録は速報性を重視し、率直な印象や本音が記載されています。そこで、アナリストの本音の中にあるノウハウを機械的に学習することを目的として、アナリスト往訪記録を対象に深層学習を用いてアナリストの文章と評価（ポジティブ/ネガティブ）の関係を学習するシステムを開発しました。

### ■ アナリストレポートシステムの刷新

AIシステムとは別に、アナリストレポートのプラットフォームも構築しています。従来はアナリストレポート作成にあたって株価情報やこれまでの実績決算数字などを記載しなけれ



運用部 企業調査グループ  
プリンシパル 木本 泰久  
運用部 企業調査グループ  
プリンシパル 西村 俊一

ばならず手間がかかっていました。そこで、合併を機に、効率化を目的としてアナリストレポート作成配信システムを刷新しました。

新システムでは、企業の実績業績データ、株価データなどがシステムと連動し、レポートに銘柄コードを入力するだけで、業績データ込みのひな型が自動的に作成されます。そのため、アナリストは企業業績の評価やその文章の入力、予想数字の作成などにより多くの時間を費やすことができるようになりました。また、システムでは、アナリストが独自に作成した表や図も添付でき、従来どおり分かりやすくかつ見栄えの良いレポートを作成することができます。

### ■ 現在の取り組み

このアナリストレポートシステムに蓄積される情報は、決算情報や業界ニュースをアナリストが総合的に分析し、必要な情報を抽出して文章化しているものであるため、自然言語処理の教師データとしても質の高いデータです。これを自然言語処理に活用できるよう、作成した文章はテキストデータとしてデータベースへ保存しデータの蓄積を行っています。

また、アナリスト往訪記録評価システムは現在検証段階のため、アナリストレポートシステムとは別で稼働していますが、2つのシステムを統合し運用支援システムとして運営していく予定です。アナリストが作成したテキスト情報などをシステムが客観的に判断し、アナリストとは異なる視点も用いてファンドマネージャーの意思決定をサポートするようなシステムに向けて取り組みを行っています。



運用部 運用開発グループ  
マネージャー 西田 大輔  
運用部 運用開発グループ  
プリンシパル 池田 佳弘